

## 梁の沈約の郊居について

誌名	ランドスケープ研究
ISSN	13408984
著者	外村, 中
巻/号	64巻3号
掲載ページ	p. 266-269
発行年月	2001年1月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



# 梁の沈約の郊居について

Shen Yüeh (441-513)'s Suburban Dwelling

外村 中\*  
Ataru SOTOMURA

摘要：中国ではすでに5世紀後半頃には、生活環境にすぐれた郊外に住居を構え、朝早く起きて都市内にある職場に通うといった、いわば極めて現代的な生活様式が一部知識人達の間で流行していたらしいことが認められる。本稿は、この点に関して最も詳しい記録を残した人物のひとりである梁の沈約(441-513)の郊居(郊外の住居)についての基礎的な考察である。

## はじめに

讚、珍、濟、興、武といった5世紀の日本の天皇の東アジアにおける活動記録を載せた『宋書』の撰者として知られる梁の沈約(441-513)は、実は郊外の住居について詳しい文章を残しているという点においても注目されるべき人物である。彼は自ら郊外に住み、自らの住居について長編「郊居賦」などを記している。その内容は、5世紀後半から6世紀はじめにかけての居住空間を考える上で貴重な記録である。そこで本稿では、「郊居賦」を中心に、彼の郊居(郊外の住居)について、初歩的な考察を行ってみたい<sup>1)</sup>。

## 1. 沈約と「郊居賦」

彼は、居宅園林内の山水を題材にした詠物詩が盛行した時代の文学における代表人物である<sup>2)</sup>。また、代表作「郊居賦」は、彼が晩年に記した国都建康の郊外にあった自らの住居についての賦である。その賦は、西晉の潘岳の「閑居賦」や宋の謝靈運の「山居賦」などととともに隠遁(隠逸)賦の代表的な作品であるが、執筆当時、彼は依然現役官僚であった<sup>3)</sup>。賦の執筆時期については、507年以降とする説と510年以降とする説があるが、これについては、執筆の開始時期はよくわからないものの、早くても完成は510年になってからのようである<sup>4)</sup>。

## 2. 沈約の居住環境論

### (1) 郊外とはどのような居住空間か

彼は、どのようなところに住みたいか、たびたび考えることがあったようで、悩んだ末、結局自ら郊居に暮らし、郊外という居住空間の独自の良さを見出すまでに至ったようである。また、それが彼の隠逸へのあこがれに基づくものであったことは、その文章が隠逸と関連して説かれていることから理解される。なお、彼の時代までの隠逸の場所としてどのようなものがあるかといえば、たとえ

ば、西晉の潘岳(247-300)が当時の国都洛陽の外郭内に構えた閑居いわば都市内の住居、東晉の陶潛(365?-427)の潯陽柴桑の園田居いわば農村中の住居、宋の謝靈運(385-433)の會稽始寧の山居いわば人里離れた山中の住居などをあげることができるが<sup>5)</sup>、彼以前に有名な「郊居」をもっていたという人物は見当たらない。もちろん、郊外に住んだのは彼だけであったというわけではない。実際、郊外に住むことは、彼の時代である5世紀後半頃には、一部知識人達の間で流行していたようで、たとえば、『南齊書』巻40、『南史』巻57によれば、齊の竟陵王子良は487年から西邸(西の郊外の邸宅)に住んでいた。また、『南齊書』巻22巻35によれば、489年以降、齊の豫章王嶷は東の郊外にあった自らの東田の邸宅に暮らしていた。また、『南史』巻57によれば、永明年間(483-493)の末、蕭衍とその兄の懿と范雲は、東の郊外に居を卜して住んでいたといわれる。しかしながら、彼のように自らの住居をあえて「郊居」と呼んで文章に残した人物は見当たらない。

ところで、彼は本来、山居にあこがれていた。たとえば、齊の国子祭酒を務めていた頃に記した「学省愁臥」には、「山の中には桂の木が多いので、歳老いてからはそこに隠れよう(山中や桂樹。歳暮可言歸。)」とある。また、彼が郊居を完成させたばかりの頃に記した「報劉杳書」には、「ふだんから人々の中にいるのが嫌いで、林壑(山林の奥深いところ)に暮らしたいと思っていたが、世事多忙で実行できなかった(生平愛嗜。不在人中。林壑之歡。多與事奪。)」とある。また、彼が晩年郊居に暮らしていた頃に記したものらしい「休沐寄懷」には、「幾重にも重なった峰があるものの、楽しむところは終に一つのちいさな丘である(雖云萬重嶺。所翫終一丘。)」とある。これも、結局郊外のささやかな丘の上にある住居に住むに終わったが、本来は山居にあこがれていたということを述べている

ものであろう。また、「報劉杳書」には、「仲長(すなわち後漢の仲長統)が遊び暮したところや休埵(すなわち三國魏の應璩)が美しいところ、空しくあこがれていた(仲長遊居之地。休埵所述之美。望慕空深。)」とある。ちなみに、仲長統(180-220)と應璩(190-252)は、ともに山居についての文章を残したことで知られる<sup>6)</sup>。また、彼が「山居賦」を記した謝靈運を文学的にたいへん意識していたことも、山居にあこがれていたことに関わる重要な点としてあげられよう<sup>7)</sup>。

では、彼は実際に山居に暮らしたかといえば、そうではなく、郊居に暮らすにとどまった。では、なぜそうかといえば、たとえば次の点が考えられる。一つには、『梁書』巻13によれば、なかなか役所務めが辞められなかったからのものである。また一つには、すでに歳を取り過ぎて気力がなくなっていたためのものである。「報劉杳書」には、「すでに歳をとり(山居に暮らす)夢を実現しようとは思わなくなったが、それでもなお、わずかに俗世から遠ざかって静かに暮らしたいと思い、…(都の)東の郊外に家を構えた。(日暮塗墀。此心往矣。猶復少存閑遠。…結宇東郊。)」とある。また一つには、郊居に山居に代るなんらかの良さを見出したからのようである。この点は、たとえば、彼が「郊居賦」を記したこと、すなわち自らの住居をあえて「郊居」と呼んだことにより理解されよう。山居へのあこがれだけの住居であれば、別に「郊居」と呼ばずに文章を展開してもよさそうである。たとえば、竟陵王子良は、西郊にあった自らの住居、すなわち雞籠山の西邸を山居とみなし「山居四時序」という文章を記したということが梁の任昉の「齊竟陵文宣王行狀」(『文選』所収)に見える。したがって、彼があえて「郊居」という言葉を用いたのは、それまでの住居とくに山居とは異なる独自の良さをそこに見出したからだと解釈することもできるのではなかろうか。

\* ヴェルツブルク大学東方文化研究所

ところで、彼が郊外の良さを見出すに至る契機となったものが、園田居（農村）へのあこがれではなかったことは注目すべきであろう。彼の作品を広く見るに、彼は郊外に独自の居住空間としての農村の良さは求めていなかった。彼が求めていたのは、山居（山中）の良さであった。したがって、彼にとって郊外とは、現実の生活のための都市内での役所勤めと、あこがれである山中での隠逸生活との両者を、ある意味で両立させることのできる独自の良さをもつ居住空間であったということができよう。

また、彼の郊居は、近年における郊外住居やベッタウンなどに通じるようないわゆる「寝る場所」であり、「働く場所」ではなかったことも特筆に値しよう。たとえば、齊の五兵尚書を務めていた頃に記した「和謝宣城」には「朝には建禮門（すなわち尚書省、正確にはその入口の門）に出向き、晩には郊外の園に帰って休む（晨趨朝建禮。晩沐臥郊園）」とあり、郊外から都市内へ通勤していたことが知られる。すなわち、彼は郊外に住んだことにより、環境の異なる都市内の職場に通わなければならなくなった。これは、いわゆる寝る場所と働く場所（あるいは多くの生活活動の場所）の環境が同じであったそれまでの住居である閑居、園田居、山居などには見られない特徴であり、いわば極めて現代的な生活様式に通じるものであり注目されよう。

なお、彼の郊居での生活を、郊居を別荘とみなしたために、ふだんは町中に住み、暇を見つけては郊外の別荘に遊ぶといった、それまでの生活様式となら変りないものとしてとらえる説もあるようだが<sup>9</sup>、それでは、郊居という居住空間を正確には理解していないように思われる。なぜなら、彼の郊居はあくまで「すまい」であり、余暇のための一時的な利用施設ではなかったからである。

### (2) 住居について

ところで、彼は、住居はぜいたくなものではなく質素であるべきだと考えていた。ぜいたくなものをよしとしなかったことは、たとえば、「郊居賦」第5段で、奢侈なものとして知られる戦國趙の武靈王が造った叢臺、春秋楚の靈王が造った章華臺、魏晉の首都洛陽の大通り銅駝街に面して建てられた立派な邸宅（具体的に誰のものを指しているのかは不明）、前漢長安の未央宮の北闕の向に建てられた高い門のそびえた邸宅（前漢の董賢の邸宅）を批判していることなどから理解される。また、「郊居賦」第6段では、三國呉の李衡が橘千本を植えた武陵の莊園と、西晉の石崇が果樹万本を植えた河南の金谷園は、有名なところではあるが、度を越えたものなので好むところではないといっている。また、住居というわけではないが、「郊居賦」第8段で

は、立派な陵墓を造らせた呉の孫權、土山というところで派手に遊び回った東晉の謝安、孫權の陵墓の地に尚書館を建て宴を催した齊の武帝、博望苑を開き立派な建物を建てた齊の文惠太子長懋の行いを批判している。

また、質素をよしとしていたことは、たとえば、「郊居賦」第5段で、やせ地のよさを説いた春秋楚の孫叔敖や、片田舎で慎ましく暮らす模範を示した前漢の蕭何の教えを好むところといっていることから理解されよう。ちなみに、ぜいたくかどうかで住居のよしあしを判断するのは、彼の特徴の一つのようで、謝靈運がしばしば美しさをもって判断していた点とは異なり注目に値しよう<sup>10</sup>。

では、彼は、住居における美的なものに関心がなかったかといえば、そうではない。この点については、彼の記した「郊居賦」の内容からだけでも、美的なものへの高い関心とかなりの水準の山水観察能力があったことが認められる。たとえば、第9段「近くに寄ってみると、それぞれの岩がそれぞれに美しい色合いをしている。遠くを眺めると、多くの峰々が青く連なっている（近循則一巖異色。遠望則百嶺俱青）」とあり、近景と遠景との対比が見られ、同時に色彩への関心も伺われる。「郊居賦」にはその他にも色彩についてのさまざまな観察が見られるが、とくに第10段「赤や青のそれぞれの色に分れて花を咲かせている木々もあるが、突然風に吹かれて色を交え、紅や紫色になったりする（或異林而分丹青。乍因風而雜紅紫。）」という観察には驚かされる。また、第6段第8段で、郊居の外東南に土山（山名）が眺められたことのほか、建物の高いところの窓を開けるとはるか遠くが見渡せたことなどを述べている点は、当時の人々の眺望行為を検討する上で参考になろう。また、第10段では、花の香りにも関心があつたらしく、蓮の花の香りをあげている。また、生き物の鳴き声にも関心があつたようで、たとえば、第6段では、楚雀や蟬などの声をあげている。さらに、四季の移り変わりにも心を動かしたようで、第10段によれば、春には木々の花、夏には蓮、秋には風や月や桂や菊、冬には氷柱や雪や鴨や雁などに目をやっている。

### 3. 郊居について

#### (1) 本宅

近年の論考や注釈をみるに、彼の郊居は別荘だったとするのが通説のようである<sup>11</sup>。しかしながら、その根拠は不明である。一方、郊居は実は本宅だったとする解釈もあるのだが、なぜかしらその解釈には注意が払われていない<sup>12</sup>。筆者はその解釈のとおりであろうと思うし、また、この点は居住空間を考える上で重要であろうと思うので、ここで確認し

ておきたい。「宋書」自序によれば、彼の祖父は415年に劉裕（すなわち宋の武帝）から建康の都亭里の運巷に館を賜ったが、「郊居賦」第2段によれば、彼は後にそれを相続したといわれる。これより、彼の本宅は、かつては運巷にあったことが知られる。「景定建康志」巻16によれば、運巷は天慶觀に接したところにあった。また、「大清・統志」江寧府「朝天宮」によれば、天慶觀とは今の朝天宮の地である。これより、その大方の位置が理解されよう。思うに、彼の運巷の宅は、都城の西南隅外西にあったようである<sup>13</sup>。「郊居賦」第2段によれば、宅の近くには、あぜ道が平に整えられ長く伸びていた（傍逸陌之脩平）。また、宅は、秦淮（川名）が清くまっすぐに流れているところに面していた（面淮流之清直）。また、第2段には、四代（東晉、宋、齊、梁）を経てその宅が荒蕪したので郊居に移ったことが述べられている。これより、運巷から居を郊居に移したことが知られ、郊居が本宅であつたらしいことが理解される。また、「梁書」巻13も、彼は東田に「宅」を造つたとするが、「別荘」を造つたとはいっていない。

#### (2) もと郊園

彼の郊居は、507年に完成したとするのが通説のようである<sup>14</sup>。では、まったくその時の創設であつたかといえば、そうではなく実のところその頃に改修されたものようである。というのは、その地はもと彼の家の園いわゆる郊園であつたらしく、さらには以前からあるいは以前の時期、彼はそこに住んでいたらしいからである。「景定建康志」巻22、巻42によれば、郊居は鍾山の下にあった。また、清の陳文述の『金陵歷代名勝志』巻4によれば、郊居はもと郊園であつたようである<sup>15</sup>。また、彼が齊の五兵尚書であつたとき、謝朓から「在郡臥病呈沈尚書」という詩を送られ、それに答えるべく近況を綴つたものが「和謝宣城」という詩であるが、その詩には「晩には郊園に帰って休む」とあり、その頃彼が郊園に住んでいたことが知られる。ちなみに、その詩は496年に記されたものらしい<sup>16</sup>。したがって、少なくともその頃には、その地を所有しそこに住んでいたようであり、郊居はその後507年頃に郊園を改修したもののようである。

#### (3) 郊居の位置、東田および周囲の状況

彼の郊居は、以下に示すとおり、都城の外東北に位置した鍾山（蔣山ともいう）の南、すなわち建康の東郊（東の郊外）の東田の地にあつた。「郊居賦」第8段第9段によれば、郊居の外東北には鍾山にあつた建物が、外東南には土山、方山が、外東には博望苑の跡が眺められたという。したがって、郊居の地は正確にはわからないが、明の陳沂の『金陵古

今圖考』に示された郊園の推定地と見て大方誤りはなさそうである(図参照)<sup>16)</sup>。なお、郊居は山里離れた野の果てにあったとする説もあるが<sup>17)</sup>、当時の建康の状況から考えるに、そうではなかったようである<sup>18)</sup>。

ところで、『梁書』巻13によれば、彼の郊居は東田にあった。また、『南史』巻5によれば、齊の文惠太子長懋は東田を開いたといわれる。では、彼の郊居は太子が開いた東田の内であったかといえ、どうやらそうではなかったようである。まず、『南齊書』巻34によれば、齊の武帝は「豫章王の東田」へ行き宴を催したといわれる。これより、太子が東田を開き所有していたのと同じ頃に他にも「誰かの東田」があったことが知られる。ちなみに『南齊書』巻21、巻22、『元和郡縣圖志』巻25によれば、「豫章王の東田」も建康の東郊に位置していた。また、『南齊書』巻6によれば、太子が開いた東田は正確には「太子の東田」と呼ばれていたらしい<sup>19)</sup>。また、『南齊書』巻21には、「東田」と「太子の東田」を区別して記しているらしい内容も見られる<sup>20)</sup>。したがって、「東田」といえば実は建康の東郊を広く指し、太子が開いたのは時に「東田」と称されることもあったが正確には東田(建康の東郊)の一部の「太子(自身)の東田」であったように思われる。また、『南齊書』巻21によれば、東晉の明帝が太子のときに西池を造ったのにあやかり、文惠太子は東田に小苑を開いたといわれる。『景定建康志』巻22によれば、その苑は博望苑と呼ばれていたらしい。したがって、東田に小苑を開いたという記録は、以上によれば、おそらく東田(建康の東郊)に博望苑を開いたということであろう。そして、かりにこの博望苑を「太子の東田」と置き換えて、東田(建康の東郊)に博望苑(太子の東田)を開いたと解釈しても、資料的にはなにも矛盾を生じない。したがって、「太子の東田」は、実は博望苑そのものであったように思われる。「郊居賦」第8段によれば、東田にあったといわれる彼の郊居の外東に、博望苑の跡が眺められたといわれるが、これは、東田(建康の東郊)にあった彼の郊居の外東に博望苑(太子の東田)があったということであろう。したがって、彼の郊居は、太子が開いた東田の内には位置していなかったように思われる<sup>21)</sup>。なお、博望苑の位置は、『金陵古今圖考』には、沈約郊園の南に示されているが、先に述べたように郊園はすなわち郊居のことらしいので、郊園の南ではなく東に置くべきであろう(図参照)。

また、「郊居賦」第8段第10段には、東川と西陵のほか、東晉と宋の二代の墳墓などが郊居の付近にあったことが記されている。東川とは、いずれの川を指すものか断定はでき

ないが、あるいは、建康の都城の外東を流れていた青溪という川(あるいは運河)のことかもしれない。というのは、『建康實録』巻2に、「東渠を鑿ち、それを青溪と名付けた」とあり、青溪が東を流れる川とみなされていたことが知られ、また、青溪は後湖(玄武湖)から鍾山の西を通り南へ流れていたといわれるので、青溪は郊居の付近を流れていたと考えられるからである。なお、東川が青溪だとすれば、郊居と鍾山、土山、方山との位置関係から見て、東川は郊居の西を流れていたことになるが、あるいはこれは、次にあげる西陵が郊居の東にあったらしいことに対応するものかもしれない。西陵とは、齊の文惠太子之陵とする説もあるが<sup>22)</sup>、「郊居賦」第8段によれば、それは呉の孫權の陵のようであり<sup>23)</sup>、また、それは当時すでに盗掘されていたようである。『景定建康志』巻43によれば、孫權の陵は鍾山の南にあった。『陶庵夢憶』巻1によれば、明の太祖の陵墓の門の左に孫權の墓があった。また、近年の研究によれば、西陵は明孝陵前の梅花山一帯であろうといわれる<sup>24)</sup>。したがって、「西陵」とはいうが、鍾山や土山などとの位置関係から見て、西陵は郊居の東に位置していたようである。また、「郊居賦」第8段によれば、西陵の付近に商巖館があったらしい。『南齊書』巻3によれば、487年の9月9日に齊の武帝はそこで宴を催している。館は武帝が建てたもので孫陵崗にあり、世に「九日臺」と呼ばれていた。なお、『景定建康志』巻22によれば、孫陵崗は呉の大帝の蔣陵すなわち西陵であるという。また、『元和郡縣圖志』巻25によれば、東晉の康帝、簡文帝、孝武帝、安帝、恭帝の陵が鍾山の西南に、宋の武帝、文帝の陵が鍾山の東南にあったといわれる。

#### (4) 郊居の規模

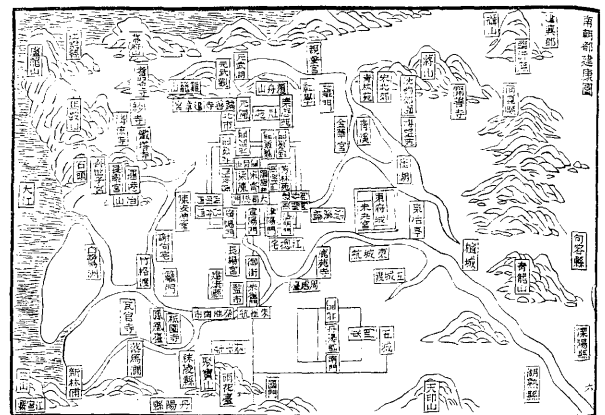
彼の郊居の規模については、相異なる二つの情報がある。すなわち、広さ三十畝(約1.62ha)とするものと、三千畝(約162ha)とするものがある。実は、三十畝とするのも三千畝とするのも、ともに彼の「憩郊園和約法師採藥」という詩にもとづくもので、テキストにより同じ箇所を「十」とするものと「千」とするものがあるため、違いが生じている。「十」とするテキストとしては、『藝文類聚』巻81や『景定建康志』巻22をはじめとする地方志などがあげられる。一方「千」とするテキストとしては、『全梁詩』

や『漢魏六朝百三家集』所収『沈隱侯集』などがあげられる。ちなみに、その箇所は、「郭外三十(千)畝。欲以賀朝禮。」という一聯である。ところで、1畝は1歩×240歩の広さで、1歩は6尺である<sup>25)</sup>。また、当時の1尺は約25cmである。したがって、三十畝は約1.62haになるが、一方、三千畝は約162haとなり、実際の地図に落とした場合、都城の規模(約425.25ha)、宮城の規模(約81ha)と比較して広過ぎるように思われる<sup>26)</sup>。また、資料的に見ても、三十畝とする『藝文類聚』は他の資料より古くてより信頼できそうな文献なので、おそらく郊居の規模は三十畝であったと考えておいてよいであろう<sup>27)</sup>。

#### ⑤ 郊居内の状況

ここでは、「郊居賦」第6段第7段第10段の内容に基づき、郊居内の状況を整理しておこう。とくに、彼は果樹はぜいたくなものとして嫌っていたらしいことは、李衡と石崇についての批判より理解されるが、以下に見るとおり、蓮や竹や草木や花は大いに好むところであったらしい。

さて、「郊居賦」によれば、郊居の内、東と北には田畑があり、北には新たに渠が掘られていた(緯東菑之故耜。浸北畝之新渠)。その渠の辺りには枳が植えられていた(藝芳枳於北渠)。また、「南池、北樓」、「南軒、北堂」があった。南に池があり、池の北に建物が南北に並んでいたのであろうか。建物は粗末で、扉は飾りなく、雑木を織って作った門や、柱の籬があった(遷窳闢於闌室。同肩牆於華堵。織宿楚以成門。籍外扉而為戸。…又因籬於芳杜)。建物は茅葺きの粗末なものだった(編霜菼。茸寒茅)。建物は蔦に覆われ、軒は近くに生えている松や栢の枝がかかるといった(室闌蘿葛。檐梢松栢)。建物の高いところからは遠くが見渡せた(閑閣室以遠臨。闕高軒而旁觀)。また、建物の前には、木陰をつくるほどの木々が茂っていた(既取陰於庭榭)。林では鳥が飛び囀っていた(其林鳥則



『金陵歷代名勝志』南朝都建康圖(明の陳沂の『金陵古今圖考』南朝都建康圖による)

翻泊頡頏。遺音下上。楚雀多名。流嘯雜響)。竹もあつた(其竹則東南獨秀。九府擅奇)。竹林では蟬が鳴き、雀が囀っていた(秋蟬吟葉。寒雀噪枝)。桂や菊も生えていた(蔓長柯於簷桂。發黃華於庭菊)。また、建物や池の辺りには、多くの草木が茂っていた(因犯檐而刊樹。由妨基而翳巢。…其陸卉則紫籜綠蕨。天蒼山韭。雁齒藥舌。牛脣鹿首。布渡南池之陽。爛漫北樓之後。或幕渚而花地。或縈窗而窺牖)。紅の花や白い花が咲いていた(抽紅英於紫蒂。銜素蕊於青跗)。赤や青の花を咲かせた木々があつた(晚樹開花。初英落葉。或異林而分丹青。乍因風而雜紅紫)。池の辺りには、楊が植えられていた(樹脩楊於南浦)。竹も生えていた(月籠連於池竹)。池は建物の軒下まで導かれ、池の周囲には道がめぐらされていた(漸沼沚於垂垂。周墜陌於堂下)。また、池には赤い鯉などの魚(其魚則赤鯉青魴。織儵鉅鱧)や野生の水鳥(其水禽則大鴻小雁。天狗澤虞。秋鷗寒鷗。脩鷓短鳧)が遊び、蓮の他多くの水草が生えていた(其水草則蘋萍芡芰。菁藻蒹菹。石衣海髮。黃荇綠蒲。動紅荷於輕浪。覆碧葉於澄湖…紫蓮夜發。紅荷曉舒。輕風微動。其芳襲余)。

註：

- 1) 「郊居賦」の原文は『梁書』巻13を参照。なお、紙幅の都合上本稿にて原文を示せない箇所は、中華書局本の段落番号を示しておく。また沈約の作品は、たとえば『漢魏六朝百三家集』所収『沈隱侯集』を参照。また、ランドスケープ分野で、沈約についての専論はないようである。近い分野の研究としては、a) 大室幹雄(1985)：園林都市(中世中国の世界像)：三省堂。年譜としては、b) 伍俶(1931)：沈約年譜：国立中山大学文史研究所輯刊 1-1, pp. 15-60。c) 鈴木虎夫(1927)：沈休文年譜：業間録：弘文堂書房, pp. 1-76。以上の鈴木年譜はすぐれたものであるが、竟陵王子良に関わる記事について誤解があるのが惜まれる。その他、d) 網祐次(1961)：南朝士大夫の精神の一面(沈約について)：文斯 30, pp. 13-23。e) 越智重明(1985)：沈約と宋書：魏晉南朝の人と社会：研文出版, pp. 229-283。f) 興膳宏(1980)：『宋書』謝靈運傳論をめぐって：東方学 59, pp. 1-18。g) 神楽岡昌俊(1993)：中国における隱逸思想の研究：ペリカン社。h) 中森健二(1984)：沈約『郊居賦』について：学林 3, pp. 30-45。i) 中森健二(1983)：沈約と鍾嶸(謝靈運の評価をめぐって)：学林 2, pp. 60-74。j) 藤原尚(1965)：「隱遁の賦」の流れよりみた「郊居賦」の位置：支那学研究 31, pp. 11-22。k) 齋藤希史(1990)：居の文学(六朝山

池中に島があつたかどうかはわからない。また、築山に関する内容も見られない。また、小さな流れが引かれ、井戸があり、その周りは石畳となっていた(決渟洿之汀澹。塞井登之淪坳)。

彼の郊居内は、大方以上のとおりであった。もちろん、以上は言葉遊びのところもあるかと思われ、どれだけ事実を伝えるものであるかは不明だが、少なくとも彼があこがれていた居住空間の内容は、以上のものであったと考えておいてよいであろう。なお、彼の「休沐寄懷」という詩には、「郊居賦」を要約した内容が見られる。

おわりに

梁の沈約にとって郊外とは、現実生活のための役所勤めと、あこがれである山中での隱逸生活との両者を、ある意味で両立させることのできる都市と山中の良さを兼ね備えた独自の良さをもつ居住空間であったようである。また、彼が自ら営んだ郊居は、いわば寝る場所であり働く場所ではなかった。彼は質素な郊居で、果樹は奢侈なものとして嫌い、花や草木を好み、色彩に関心を示し、窓から遠く

の景色を眺め、花の香りを楽しみ、鳥や蟬の鳴き声に耳を傾け、四季の変化に目をやった。そこは、別荘ではなく本宅で、496年には所有していた園いわゆる郊園を、507年頃に改修したものらしい。また、そこは、国都建康の東の郊外いわゆる東田に位置し、その外東北には鍾山にあつた建物が、外東南には土山や方山が、外東には齊の文惠太子が開いた博望苑(おそらく「太子の東田」のこと)が眺められた。また、外西には青溪が流れ、外東には呉の孫權の陵があつたらしい。郊居の内は、広さ30畝(約1.62ha)で、南には池があり、池の北には建物があつた、その北には畑があつた。また、東にも畑が広がっていた。

以上、本稿で考察したところは、彼の文学作品などによる推測であるから、もちろんどれだけ事実であつたかはわからない。しかしながら、彼が遅くとも6世紀はじめまでに郊外の住居とくに「郊居」という言葉をもって独自の良さをもつ居住空間として意識し、さらにはその状況をかなり詳しく記している点は、その内容とあわせて、今後ランドスケープ・環境デザイン史上さらに検討が加えられてもよいであろう。

- 水・隱逸文学への一視座)：中国文学報 42, pp. 61-92。1) 吉川忠夫(1968)：沈約の傳記とその生活：東海大学紀要文学部 11, pp. 31-45。m) 吉川忠夫(1970)：沈約の思想：中国中世史研究(六朝隋唐の社会と文化)：東海大学出版会, pp. 246-271。「郊居賦」の注釈としては、n) 岡村繁(1951)：沈約郊居賦雷張同箋補正：日本中国学会報 3, pp. 64-74。o) 今場正美(1997)：沈約「郊居賦」譯註：学林 27, pp. 87-121。p) Mother, Richard(1988)：The Poet Shen Yüeh (441-513)：Princeton University Press
- 2) 小尾郊一(1962)：中国文学に現れた自然と自然観：岩波書店
- 3) 註1-e) 越智を参照。
- 4) 507年以降とする説として註1-c) 鈴木があるが、その根拠はよくわからない。一方、510年以降とする説としては、註1-1) 吉川と註1-h) 中森がある。
- 5) 潘岳「閑居賦」、陶潛「歸園田居詩」、謝靈運「山居賦」などを参照。
- 6) 『文選』所収「齊竟陵文宣王行狀」を参照。
- 7) 註1-h) 中森を参照。
- 8) 註1-a) 大室を参照。
- 9) たとえば「山居賦」第3段を参照。
- 10) 註1-a) 大室を参照。
- 11) 註1-1) 吉川を参照。なお、正確には「本宅」とはっていないが、運巷より移った邸宅としているので、本宅として扱っていることが知られる。

- 12) 拙稿(1998)：六朝建康都城宮城攷：中国技術史の研究：pp. 247-305。
- 13) 註1-b) 伍を参照。
- 14) 註1-c) 鈴木を参照。なお、鈴木は郊居に関する詩として沈約の「休沐寄懷」「宿東園」「憩郊園和約法師採藥」をあげている。
- 15) 註1-b) 伍、註1-c) 鈴木を参照。
- 16) 註1-c) 鈴木は、郊居の位置を半山寺の付近(おそらくは西北方)とする。その根拠とした土山についての検討には問題がありそうだが、彼の推定地で正しそうである。半山寺、土山については次の図を参照。朱僕(1936)：金陵古蹟圖考：上海商務印書館
- 17) 註1-j) 藤原を参照。
- 18) 註12) 拙稿を参照。
- 19) 『南齊書』巻6「廢文帝所起太子東田。」の「太子東田」は固有名詞のようである。
- 20) 『南齊書』巻21「求東田起小苑。上許之。…後上幸豫章王宅。還過太子東田。」
- 21) ただし、以上のように考えない解釈もある。註1-a) 大室 p. 482-を参照。
- 22) 註1-j) 藤原を参照。
- 23) 『六朝事迹編類』巻下を参照。また、文惠太子陵については、『竟陵建康志』巻43。
- 24) 羅宗真(1996)：六朝考古：南京大学出版社
- 25) 吳承洛(1993)：中国度量衡史：商務印書館
- 26) 註12) 拙稿を参照。
- 27) 三十畝が正しいと判断した文献として、すでに次がある。陳慶元(1995)：沈約集校箋：浙江古籍出版社(2000. 4. 29 受付, 2000. 11. 18 受理)

Summary: Shen Yüeh(441-513), a high ranking government official and famous poet, not only lived in the suburbs himself but also discussed the theme of "the suburbs" as a dwelling space in his writings. This paper analyses his views on the suburbs through examining his "Chiao-chü fu (Poetic Essay on Living in the Suburbs)" and his other literary works. It is concluded that the suburbs, for him, constituted unique surroundings by their nature of providing a feeling of living in the mountains while still being part of urban life, as opposed to living in the countryside.